

氷河から流れ落ちてくる完璧に清浄な水をたたえ、揺らめく水が宝石のように光り輝く美しい湖。背後にそそり立つ雪と氷を戴いた岩峰。吸い込まれそうなほど青い空。まるで天国の風景みたい・・・

しかし、そんな別世界の美しい景色の中、可愛い利発な少年と二人きりで過ごす幸せな時間は、まことに遺憾ながらそんなに長くは続かなかった。

私達が湖の畔に着いてから十数分後、後から登ってきた烏里氏が追いついてきて、天国の湖に到着したのだ。烏里氏は着くなり少年に事務的に言った。

「Kさん達は途中でリタイアして此処には登ってこないから、すぐに荷物を届けなさい」

あっという間に少年はいなくなり、この美しい場所でもうしばらく少年と遊んでから一緒に下山したかった私はちょっとガッカリした気分になると、内心少しだけ烏里氏を恨んだのだ。

ちえ！！烏里さんたらもっと遅く登ってくれば良かったのに！

しかし烏里氏は私のそんな気分には全く気付かずに、あたりの風景や野草をサッと写真に撮ると、「この上にもう一つ湖があるから行きましょう」とサッサと先にたつて湖の脇の斜面を登り始めた。下界に居るのなら何という事はないのだが、もう限界に近いくらいの思いでやっと登ってきた高度から更に斜面を登るのはものすごくキツイ。とにかくたった1メートル登るのが大変な苦労なのだ。身体が重くて重くて手足が思うように持ち上がらず、一足登るごとに呼吸が苦しい。

ああ、エベレスト登山隊の気持ちが解る～！

斜面には高山にしか咲かないという青いケシが美しい花を咲かせていた。

長い時間をかけなんとか私が斜面を登りきった時には、烏里氏は何処へ行ったのやらとっくに見えなくなっていた。振り返れば眼下には先程の湖が降り注ぐ陽の光を浴び、揺らめいて燃えるようなコバルトブルーに耀いている。真上から眺めると一層美しさが際立つようだ。

さっきは少年と一緒にだったが、今は一人きりだ。誰にも気兼ねなく、心からこの風景の美しさに浸ることができた。見つめていると、涙がにじんできた。

こんなに綺麗なものがこの世にあるなんて知らなかったよ・・・

世界各地に絶景と呼ばれる美しい土地は沢山ある。日本国内に限っても沖縄のエメラルドグリーン的大海だって、白銀に輝く富士の峰だって、その他世界中にこの湖と同じくらいか、それ以上に美しい風景はいくらでもあるのだろう。

しかし、これまでに私が触れてきたそれらの殆どは、ガイドブックの写真やテレビの映像、その美しさを賞賛する

文章や人の言葉など多くの情報によりあらかじめ認知され、心の準備ができていた状態でのぞむ事により、そこから受ける感動の度合いは少し薄められていたのではないだろうか。この宝石のように輝く湖の美しさは、その時の私にとって全くの予想外だった。それまでに出会ってきた湖の常識から想像できる範疇を遥かに超えたその美しさに、私はかつて感じたことの無い衝撃と大きな感動を受けていた。

先ほどよりも高度が上がり、向かい側の岩山の氷河は目と同じ高さに見えていた。下にいる時には見えなかったが、斜面の上立つと宝石の湖の上には岩山から流れ落ちてくる雪解け水の受け皿となる小さな泉がもう一つあるのが見えた。湖からさらに奥へ目を向ければ私達が登ってきた登山道から湖畔を通り、更に山奥へと続いて行く道が見える。

ああ・・・あそこを歩いていけば、この奥にも綺麗な湖があるのだろうか。

自分もあの道をたどって、この土地のもっと奥深くまで入って行きたいという気持ちが込み上げてくる。

以前観た『キャラバン』という映画を思い出した。チベットに程近いヒマラヤの大自然を舞台としたその映画は、ヒマラヤの高原で暮らす民族が生活物資を得るための塩を交易する隊商を組み、何ヶ月も厳しい自然と戦いながらヒマラヤの山々を越えて旅する姿を雄大に描いたストーリーだ。

そういえば、あの映画の中にも真っ青な湖が出てきてその美しさに驚いた事を思い出した。下界の人間がおいそれとは近づけない厳しい高山の中に、自然はこんなに素晴らしい宝物を隠し持っているのだ。あの映画のようにずっとずっと何日もこの山々を越えて歩いてみたら、そこにはどんな世界があるのだろうか・・・

天国の湖から上りきった斜面を少し歩いて行くと、地面が火口跡のようにすり鉢状にくぼんでいるのが見えてきた。先ほど烏里氏が言っていたもう一つの湖に違いない。期待で胸がドキドキした。近づくにつれてじわじわとくぼみの底の方が見えてくる。

ああ・・・やはりこちらにも期待にたがわぬ美しい湖だ。

先程の湖より水深があるためか、水はより深い青さをたたえながらも水底の石一つ一つが完全に透けて見えている。窪地の底に在り水の流れの無い湖なので、鏡のように滑らかな水面には動きが無くシンとした印象だ。すり鉢の真上から眺めると水深や水底に落ちている石の色により、湖の色に微妙なグラデーションができていたのが何ともいえず美しい。まったくこの自然がつくりだす芸術品と比べたら、たとえ何億、何千万と値のつく貴金属だろうと装飾品だろうと、その美しさは到底及ばないだろうとしみじみ思う。

再び登るのが大変だとは思ったが、やはり水辺に降り

てみたい気持ちが抑えられず、すり鉢の内側を下って湖の畔まで降りた。湖の周囲にも水の中にも大小の石がゴロゴロ落ちているのは、この湖の真上にそそり立つ岩山から落ちてきた物だろうか。見上げると手を伸ばせば届きそうに見える氷河が今にも滑り落ちてきそう。美しい風景に酔いながら、私は少し怖かった。

怖いくらいに透明な青い青い湖のシンとした美しさ。どこまでも深く濃く吸い込まれそうに青い空。目の前にそそり立つ険しい岩峰とその頭上から生々しい迫力で口を開ける氷河の裂け目。標高が高いためか目立った植物は見当たらず、生き物の気配が感じられなかった。在るのは岩と氷と水だけの世界だ。

あまりに非日常的な美しさで迫ってくる自然の中に一人でいると、その迫力に気圧されるような気がして私は少し怖くなったのだ。ゴロゴロと積み重なる石の上は歩きにくく、怖いほど青い湖の周りをヨロけながらトボトボと歩いていると、頭の中がポーっとしてきた。まるで自分が死後の世界に迷い込んでしまったような気分になってくる。

賽の川原ってこんな感じかなあ……

この世で自分が一人ぼっちになったような気分だ。

頭上で「ゴトッ……」という鈍い音が響いてきた。

ハッとして岩山を見上げると、続いてゴ、ゴ、ゴ、ゴ、と、地鳴りのような音が響いてくるのが聞こえた。

もしかして岩が崩れてくるの!?

もし、ここで落石などあれば、岩山の真下にいる私に逃げ場は無い。石がゴロゴロしている窪地の底で、素早く落ちてくる岩をかわして逃げるなど到底不可能だ。恐怖で身体がすくみしばらく身を硬くしていたが、あたりはシンとしたまま何も起こらなかった。

恐る恐る再び歩き始めた。岩山の直下にはひととき大きな石がゴロゴロと落ちていて、その場を通り抜ける時は緊張したが、その時の私はどこか「ここで死ぬんならいいや……」などという気持ちになっていた。

「下界から遠く離れた、こんな美しい自然の中でなら死んでもいい……」

非現実的な美しさの中に一人きりでいる孤独と緊張に酔ってしまった様に頭の中が痺れてぼんやりしていた。烏里氏の事も、先程まで一緒に過ごしていた少年の事も、山の麓にいる旅行メンバーの事も忘れていた。まるで世界で自分が一人きり取り残されてしまったような気分だった。

岩の裂ける様な「ゴトッ」という音や地鳴りの様な音は、その後も何度か聞こえてきて、あれは氷河がひび割れる音なのだと気がついた。長い年月の間に堆積した雪で硬く凍りついている氷河が、夏の時期になると緩んでひび割れる音が響いているのに違いない。地鳴りの音など生まれて初めて聞いたが、お腹の底に響いてくるようなあの音は、今でも思い出すと頭の中に甦ってくる。

湖の周りをぐるりと回ってみたいと思い、ぼうっとした頭で湖畔に沿って歩いていると、対岸から見た時にはたや

すく歩けそうに見えた場所が、大きな岩に遮られ行く手が阻まれていた。

足場を探しながら苦心して何とか岩をよじ登った時である。掴んでいた岩の陰にへばり付く様に細々と生えていた草の中に一匹の毛虫がいた。

私は昆虫や爬虫類の類は何でも平気だが、芋虫と毛虫だけは最大の苦手で見ただけでも背筋が粟立つ。普段の私なら自分の手元に毛虫を見つけたりしようものなら、絶叫してその場から飛びのくところだが、なぜかこの時はピクッとしたものの暖かい気持ちが込み上げてきた。この数時間まるっきり生き物の気配が感じられない賽の川原を孤独にさまよっていた私には、大嫌いな毛虫にさえ命あるものへ愛おしさが感じられてしまったのだ。

お前、こんな場所で頑張ってるのかあ……。

思わず毛虫に声をかけてしまったのは、後にも先にもこの時だけだ。黒い身体に首の部分がぼっちりと赤色の毛虫だった。

午後遅い時間になっていたらしく、日差しが和らぎ日が傾き始めていた。

遠くから叫び声がしたので目を上げると、それまで何処にいたのかずっと姿を消していた烏里氏が湖の対岸に立っているのが小さく見えた。「そろそろ戻りましょう」と叫んで登ってきた方向を指差している。

ああ、死後の世界を彷徨っていたのじゃなかったのか。

空想の世界から急に現実に戻され、残念なようなホッとしたような気持ちになって麓に下りる道の方向に向かうと、「天国の湖」と「賽の川原の湖」の中間に当たる場所に出て、美しい湖を同時に見下ろすことが出来た。なごり惜しくて何度も何度も足を止め振り返り振り返りしながら山を下りた。

誰が何と言おうとこの半日この場所の景色は私だけの物だった。チラッと姿を現してすぐに消えてしまった烏里氏は私の視界から完全に姿を消してしまい、この凄まじく美しい世界を私は一人きりで噛み締めていたのだから……

これが三年前(既に四年前になってしまった)の私の亜丁の思い出である。

この日、日暮れ前ギリギリでキャンプ場に戻った時には、辺りは既に暗くなりかけていた。幻の湖を見ることなく先にキャンプ場に戻っていた母達一行に、憑かれたように興奮して今日の出来事を語りながら夕食を取りおえるとすぐに眠ってしまい、翌朝朝食が済んだ時には二日前に私達を下村から乗せてきた馬が迎えに来ていた。せわしなく荷物をまとめ、くだんの少年とゆっくり別れを惜しむ間もなく馬に乗るように促されると、一行はすぐに出発してしまっただけだ。

私はとことん後ろ髪を引かれる思いで亜丁を後にし、その時から亜丁は特別な場所として私の心の中に沈んでいたのだった。